

2022年9月29日

原告意見陳述

清水あや子（伊方町在住）

私は伊方町亀浦地区に生まれ、小学校を卒業するまでをそこで暮らしました。伊方原発から東へ約2キロ。瀬戸内海に面した原発の隣の集落です。中学からは今治市で暮らしていましたが昨年3月伊方町川永田に転居し、48年ぶりに帰郷しました。川永田は瀬戸内海側の亀浦地区からは山を挟んだ真裏、宇和海側にあります。「わざわざ原発のあるところへ帰らなくても」という人もいましたが、川永田は母の実家であり、近所に二人の兄も住んでいるので、私が帰るところは伊方町しかありません。

小学校6年生の時に1号機の建設が始まりました。その数年前から建設予定地の住民を中心に激しい反対運動が起こっていたことは、なんとなくわかっていたのですがあくまでも大人の世界のことで、当時の子供達は科学の最先端技術を集めた施設が地元で建設されるという、むしろ期待や誇らしい気持ちが強かったと記憶しています。また、みかんの収穫期と正月休み以外は出稼ぎで家にいなかった父が、現地採用で建設現場の守衛として働くことになり、ずっと家にいることが嬉しくてたまりませんでした。そんな子供達はたくさんいたと思います。

学校からの見学会や遠足、写生大会も建設地で行われました。見学会に行ったとき、私は「なぜ、伊方が建設地に選ばれたのですか」と質問しました。説明にあたった職員は「ここの岩盤は非常に固く、関東大震災のような大地震がきても建物が

壊れないから」と誇らしげに応えたことを覚えています。

1977年に1号機の運転が開始されました。私は高校生になっており、子供の頃のような高揚感はなかったものの、エネルギーの安定供給が確保されると、まだ原発を信じていました。気持ちに少し変化がおきたのは、その2年後アメリカ・スリーマイル島での原発事故を伝えるニュースを見たときです。「原発で事故が起きる」という現実には不安を覚え始めました。そしてさらに衝撃を受けたのが、その7年後のチェルノブイリ原発の事故でした。世界中を恐怖させ、放射能被害はヨーロッパ全体に及んだと記憶しています。壊れた建屋から放出される放射能を消す術はなく、石棺と呼ばれるコンクリートで覆うことしかできませんでした。その後さらにシェルターで覆いましたが、放射能が消えたわけではありません。今も30km圏内は立ち入り禁止となっており、ウクライナに侵略したロシア兵が、占拠した原発で多数被曝したと伝えた海外メディアもありました。

チェルノブイリの「事故の後」を見たことにより、原発に対する不安の芽は不信に変わりました。1993年から今治民主商工会事務局員として働くようになり、原発について学習する機会が増え、それまで知らされず、知ろうともしなかった原発にまつわる様々な矛盾や疑問が一気に広がりました。伊方原発のすぐ目の前に中央構造線の活断層があること、使用済み核燃料の安全な廃棄処分が事実上不可能なこと、放射能を伴う核の半減期は数万年単位であるということ。また、アメリカの対ソ連政策に乗り、当時の読売新聞社社主が利権と政治力の拡大に利用するために、大キャンペーンを張って全国に推進したことなど。あのときの大人たちは知らされていたのでしょうか。子供と同じように科学技術に期待し、地域経済の発展に心躍らせていただけだったのではないのでしょうか。50年後、夢見た未来は訪れず、原発頼みの経済は先細り、町の人口は減り続けています。

そしてとうとう日本の原発、福島第1原発の事故が起きました。建屋が爆発する衝撃映像は忘れられません。放射性物質は大気中に、海中にとまき散らされ、一部

の地域は今も立ち入ることができません。そこにあった町の営みは破壊され捨てられた町になっているのです。

福島事故の原因は、地震と津波による電源喪失で起こった炉心のメルトダウンです。想定外の地震と大津波であったと東電は言い訳していました。かつて「伊方原発の岩盤は固くて大地震にも耐えられる」と語ったあの職員の言葉が蘇りました。当時伊方発電所はどれくらいの地震を想定していたのか、津波の想定はしていたのか。あのときの言葉が文字通り子供だましのように思われました。

佐田岬半島は地滑りの多いところですが、長雨の時期や大雨が降ると、大小の差はありますが必ずどこかで土砂崩れがおきて道路を塞ぐなどの被害があります。南北に狭く平地の少ない半島に造られた原発は裏山を削り、海を埋め立てて敷地を造成しています。南海トラフ大地震の切迫性が高まる中、また昨今の異常気象による桁外れの豪雨の心配もある中、地震・津波に加えて土石流が原発敷地に押し寄せることはないのでしょうか。爆弾低気圧が起こす落雷によって電源喪失は起きないのでしょうか。そんな中、耐用年数がだんだん延びていくのも不気味です。

もし伊方原発で事故が発生したとき住民はどうなるのでしょうか。半島の入り江ごとに小さな集落を持つ伊方町は、そのほとんどが限界集落です。主要幹線道路は半島の尾根を走る国道197号線しかありません。どの集落へも、国道から高低差が何十メートルもある、カーブ続きの山道をうねうねと下っていかねばなりません。そのうえ家屋は山の斜面にへばりつくように建っており、車を横着けでできる家はわずかです。人ひとりがようやく歩けるほどの、迷路のような道が家と家を上下左右に繋いでいます。このような隘路を通して、ほとんどが高齢者である住民を、安全に迅速に全員避難させることが可能でしょうか。しかも万が一事故が起きた場合の避難計画は実質自治体任せで、四国電力が住民避難と生活再建の最前線に立つことはないと思われます。福島でも、事故後の住民の生活再建はおろか事故収束の対策すら進んでいるとはいえません。人口100人にも満たない限界集

落がいくつか消えたところで、この国にさほど影響はないのかもしれませんが。事故が起こったときには「被災者何人」と、数字で表される私たち住民ですが、それぞれ家族がありくらしや歴史があります。それはとても重いものです。原発事故が起これば、伊方町民は放射能汚染によって望まぬ形でふるさとを追われ、それまでのくらしのすべてを一度失います。それは誰がどんなことをしても償いきれるものではありません。防ぐことができる事故なら防げばいい。原発を無くすことで原発事故は防げるのです。家族や大切な人が安全に笑顔で暮らせること、それこそが平和であり、私たちが願うのはそんなシンプルなことなのです。

企業は社会に貢献してこそ価値があると思います。電力供給は素晴らしい社会貢献ですが、発電方法をより安全なものに見直すことはもっと大きな社会貢献だと思います。今進めるべきは、使用済み核燃料の乾式貯蔵施設建設ではなく、一日も早く自然エネルギーへの転換を図ることです。そのための技術は充分あると思います。現に世界では脱原発にシフトした国もあります。

今、持続可能な社会を作ることは世界共通の目標となりました。原発は事故が起これば、そこでの社会の営みは持続不可能になります。それはチェルノブイリ、福島を例に挙げるまでもありません。あのとき子供だった私たちは、「原発のない町」を選ばませんでした。だからこそ今の子供達の間も訴えたいのです。人間の手に負えないものを次の世代に押しつけてはならない。今の子供達が大人になる前に「原発をやめた町」を手渡したいのです。

伊方町は美しい海岸線に縁取られ、明るい海に抱かれた風光明媚な町です。このふるさとを守り、原発事故の心配なく暮らし続ける権利が私たち住民にはあります。どうかこの権利を守らせてください。